

暖地型牧草の刈取りと再生

黒江秀雄・折田安行・恒吉利彦

(鹿児島県畜産試験場)

KUROE, H., ORITA, Y. and TSUNEYOSHI, T.

Studies on Cutting and Regeneration of Tropical Grasses.

近年、暖地型牧草が徐々に農家に普及しつつある。しかし、その栽培利用においては、発芽率の不安定、初期生育の遅れ、再生不良等解決すべき点が多い。本試験は、機械化栽培利用上の適正な刈取り高さおよび刈取りステージを求めるために素材試験として手刈法で行ったものである。

試験方法

1. 刈取り高さ

1) 供試牧草 シコクビエ, カラーダギニア, ローズグラス 2) 刈取り高さ 5, 10, 15cm 3) 播種日昭和49年5月16日 4) 播種量 2 kg/10 a 5) 調査日7月8日, 8月12日, 10月11日 6) 施肥量 (kg/10 a) 基肥 N : 10, P₂O₅ : 20, K₂O : 10, 追肥は刈取り毎に N : 10, K₂O : 10 を施用。

2. 刈取りステージ

1) 供試牧草 シコクビエ, カラーダギニア 2) 処理 1番刈は、播種後45, 55, 65, 75日の4ステージを設定し、2番刈以降は再生20日後に刈取り、最終刈日を9月25日とした。なお刈取り高さは、10cmとした。

3) 播種日 昭和50年5月13日, その他施肥量等は、1の刈取り高さの試験と同様である。

結果および考察

1. 刈取り高さ

シコクビエは、15cm刈区が再生がよく収量が多かった。10cm以下の低刈では、枯死株を生じやすくこれが低収の大きな要因と思われる。カラーダギニア、ローズグラスでは、刈取り高さの相違による収量差は認められなかった。これは、両草種とも地際からの分けつが多く、それほど刈取り高さの影響を受けなかったと思われる(図1)。

2. 刈取りステージ

シコクビエは、若刈ほど再生が良好で多収であった。遅刈をすると生長点を切り、そのために再生が悪くなり

低収になったようである。刈取り高さ10cmの場合の初回刈は、草丈80cm以下で実施した方がよいと思われる。カラーダギニアはシコクビエとは逆で、若刈より遅刈の方が多収であった。カラーダギニアの場合は、地際からの分けつが主体であるが、若刈すると再生力が弱く、そのために低収になったものと思われる(図2)。

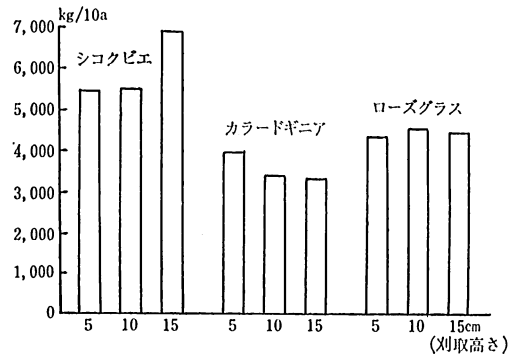


図1 刈取り高さと収量(生草)

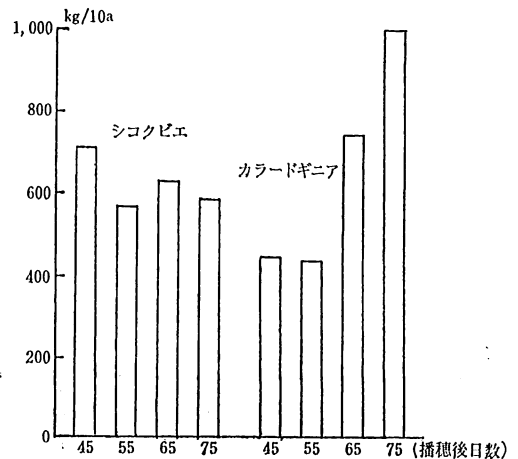


図2 刈取りステージと収量(乾物)